義士寺坂吉右衛門は伊藤家に仕えて姫路、越後村上、三河刈谷、下総古河と主君の移封に従って転々とするが、59歳、当時としては可成の老人となってから伊藤家を去り、江戸は麻布の曹渓寺の寺男となる。そこでは山内家の使用人となり、延享４年（1747年）83年の生涯を終えた。

世に出ることもなく、ひたすら忍従に堪えて軽きものの身の生涯を、静かに全うした吉右衛門は、その曹渓寺に葬られている。義士46名が眠る泉岳寺はすぐ近くである。

最後に『仮名手本忠臣蔵』を見ることにする。仮名とはいろは47文字に義士の人数が充てている。またこの芝居は、討ち入りから数えて、奇しくも47年目の寛延元年（1748年）８月、これも内匠頭の月こそ違え命日14日に大阪の竹本座において、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の作の浄瑠璃で初演されている。

『仮名手本忠臣蔵』は、時を足利時代に、所を鎌倉に設定して、十一段の芝居になっている。寺坂吉右衛門はこの芝居で、最も華やかな七段目「祇園町一力の場」におかるの兄の寺岡平右衛門として登場している。

討ち入りから２カ月も経たない元禄16年２月４日、義士達は切腹という名誉を与えられて他界した。それから12日後の同月16日、江戸の中村座では曽我兄弟の仇討ちに見せてこの事件を芝居にした。『曙夜討曽我』がそれである。だが幕府はこの上演を弾圧して３日で打ち切らせた。このことについて、俳聖松尾芭蕉の高弟宝井其角が上方の友人に宛てた手紙の中で、誰が見ても赤穂義士の物語だと分かるものであったという。それから３年後の宝永３年６月、近松門左衛門作の浄瑠璃『碁盤太平記』が大阪竹本座で上演された。これは時代を太平記に借りており、幕府の取締りに細心の神経を使っている。そして『碁盤太平記』に、今日まで上演に堪える名作『仮名手本忠臣蔵』が生まれる素地を見ることが出来る。外題の仮名手本の由来は先に述べたとおりであるが、忠臣の事績を集めたことで蔵となり、ここに＜忠臣蔵＞という日本人の心に深く刻み込まれることになる言葉が生まれたのである。また『仮名手本忠臣蔵』では『碁盤太平記』から、大星由良之助など登場人物の役名をそのまま借りている。勿論われらが寺坂吉右衛門は寺岡平右衛門として登場していることは勿論である。

さて蛇足と言われるならそれまでだが、≪三条祭り≫村上藩十万石の位の大名行列に、寺坂吉右衛門を登場させて忠臣蔵を偲ぶことも、素晴らしい企画だと思うのであるが……。

７月22日例会： 卓話　西山　斉会員
７月29日例会： 卓話
８月５日例会： 豊島分区代理を迎えて
８月12日例会： 会員増強月間
８月19日例会： 夫人同伴納涼例会
８月26日例会： 青少年活動月間

三条北ロータリークラブ週報

ロータリーの心を

あなたの住むところ
私たちの世界
そこに住むすべての人々に

例会日
1997．７．15
累　計　No 520
当　年　No　3

国際ロータリー会長 グレン W．キンロス　第2560地区ガバナー 久保田昭治

会 長／米 山 忠 俊
幹 事／吉 川 吉 彦
SAA／長谷川博一

例会日／火曜日 12:30～13:30
例会場／三条ロイヤルホテル　☎34-8111 FAX34-8114
事務局／三条市西四日町3-15-34
ヒューマン・ハーバー内　☎35-7160 FAX33-8972

行　　事： 卓話「軽きものの儀」㈱鐵販　代表取締役　森脇慶二様

出　　席： 本日の出席　５４名中　４４名
先々週の出席率　５４名中　４７名　８７.０４％（前年同期８３.９３％）
【６月の出席状況：会員数５４名　例会数４回　平均出席率８６.５８％
（前年同月８１.６７％）】

先週のメークアップ： ７月９日グアムＲＣへ　山口龍二さん
９日三条ＲＣへ　山上茂夫さん、羽賀一夫さん、斎藤　正さん
西山　斉さん、芦田義重さん、平松利朗さん
佐藤文夫さん、高橋彰雄さん、大野新吉さん
10日加茂ＲＣへ　中條耕二さん、小林　満さん、高橋彰雄さん
12日五十嵐川クリーンデー参加　芦田義重さん、今井克義さん
落合益夫さん、加藤　實さん、吉川吉彦さん
久保　博さん、佐藤啓策さん、梨本清一さん
梨木建夫さん、馬場直次郎さん、本間建雄美さん
松永昌一さん、山本　充さん、米山忠俊さん
中條耕二さん

ビジター： な　し

会長挨拶： 米山忠俊

皆さん暑中御見舞申し上げます。

このところの熱さと雨の天気にはいささかまいっています。樹木だけが元気のようす、みずみずしい樹木は私どもを爽やかな心にしてくれます。

先日７月12日（土）五十嵐川クリーンデーが行われました。心配した天気も上がり多勢の市民の方々や他の団体の皆さんと共に我がクラブも一緒に汗を流してきました。主管の社会奉仕、環境保

全委員会の皆さん、参加の皆さん朝早く、休日にほんとうにおつかれさまでした。

五十嵐川堤防もきれいになりました。山本充委員長さん大変御苦労様でした。お礼申し上げます。

又本日は江口さんが久しぶりに出席でお顔を拝見しました。大変な事があり、いろいろと御苦労があった事と思いますが、１日も早く試練を乗り越え元気で頑張って頂きたいと思います。こん後の貴社と江口新社長の御発展と御活躍をお祈り申し上げます。

本日のお客様を御紹介致します。本年度外部卓話第一号の森脇慶二様です。森脇社長様には大変御多用の中ありがとうございました。今日は宜ろしくお願いいたします。紹介頂きました外山さんいろいろ有難がとうございました。

今年も例年通り、この時期に中元の挨拶がおこなわれています。年に暮の歳暮とお盆の中元を、個人、会社を通して日頃お世話になっている目上の人とか恩人の方々に贈り、感謝の心を表わしています。

この中元の習慣は中国から伝わってきたようです。中国では中元は三元の一つで正月15日を上元、７月15日の今日を中元、10月15日を下元として合わせて三元とし食品を棒げて贖罪（しょくざい）をする日といい伝えられているそうです。贖罪とは罪をおかしたつぐないとか、罪ほろぼしという意味で、日本の中元の意味と大分違います。今年も中元の意味を大事に、相手に心が伝わる贈り物をしたいものです。

余談ですが豊臣秀吉は気配り、金配り、物配りで天下を取ったそうです。

終りに熱さ一段ときびしく体調をこわしやすい時期に向います。睡眠を十分に取り腹八分目にして、運動を六分目に適度に動かし、その程度で四十才過ぎの健康は保もたれると日本体育大学の先生の話を聞いています。

御自愛専一に充実した今夏をお過しください。

幹事報告： 吉川幹事

- 2560地区幹事より　1997～98年度公式訪問に関する件
- 社会奉仕大委員長より　社会奉仕アンケート依頼について
- 国際交流事務局より　国際交流イベント情報の提供について
- 2560地区1996～97年度Ｒ財団委員長、奨学金委員長、増進、学友、情報委員長、研究グループ交換委員長よりＲ財団寄付に関してのお礼状が来ています。

委員会報告：

◦親睦委員会

　　親睦旅行の最終決定案の発表

◦青少年育成市民大会の報告　斉藤正会員

◦江口悟会員より前社長の会葬のお礼

の当事者として状況を報告する役目を与えられて、泉岳寺門前から同志の人々から離れて行ったと考えられている。

では私の寺坂吉右衛門義士説の根拠を次に開示する。

先ずは討ち入り当事者達の残したものが一番確かなものと考える。

1．討ち入りの時、吉良邸の玄関先に立てた口上書の47名の連名の中に、吉右衛門の名が書かれていること。

2．目的を達成して吉良邸を引き上げるに際して点呼をしたところ、47名欠けることなく確認されていることが、後に義士の磯貝十郎左衛門と富森助右衛門によって書き残された「夜討状況記事」に詳しく記録されている。

3．泉岳寺に引き上げて来た義士達に接した僧白明が書き残した「白明話録」の中で、大目付へ自首に出向いた吉田忠左衛門と富森助右衛門を除く45名が寺内にいると聞いたが、どう数えても１人足りないことが分かり、そこではじめて同志の面々が吉右衛門がいないことに気づいたと記録されている。

4．大石内蔵助が取り調べの段階でことさらいなくなった吉右衛門について、「名も聞きたくない」ということは、むしろ軽い者をかばう心情が伝わる。このことが、後における吉右衛門の行動と合わせる時、大石が特命を持たせて泉岳寺門前から立ち去らせたことに結びつくのではないか。それについては大石と吉右衛門の主吉田忠左衛門との間に、十分な打ち合せと了解があったことは勿論のことである。

次に客観的に見てみることにする。

1．吉右衛門が吉田忠左衛門に仕えたのは８歳の時である。以来主が禄を失ってからも忠実に仕え、吉良邸討ち入りの義盟にも加えられている。卑怯未練な男なら、浅野家断絶によって家臣離散の折に別の身の処し方をしていたであろう。

2．これは前項の４に関連するが、吉右衛門は大石の特命を終えた後、主吉田忠左衛門の遺族が身を寄せていた、娘婿の姫路本田家の家臣伊藤十郎太夫に仕えたことである。やはり、吉田忠左衛門と伊藤十郎太夫との間にも、大石の特命を果たした後の吉右衛門の処遇についての約束がなされていたことになりはしないか。このことが、後に姫路藩主本田忠孝の村上藩転封にともなって、先に述べたわが三条と吉右衛門が、俄に身近なものとして認識されて来る所以である。

3．この項に関して私はまだ史実の確認をしていないが、多くの47士論の人々が信じている吉右衛門が伊藤家に仕える直前、大目付仙石伯耆守に自らの処分を申し出ていることである。46士論者がいう「軽きものの」死を惜しむような卑怯者なら、そのような行動する訳がない。この時、大目付はその振る舞いが天晴れであると称賛して金十両を与えたという。少し出来すぎのようにも思えるが、47士論者としては溜飲が下がるところであろう。